全小社研徳島大会 大会主題（概要版）

2025/3/31 現在

「未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成」
－社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習－

Ⅰ 大会主題 目次

1 大会主題設定の理由

(1)社会の情勢及び教育をめぐる動向から

(2)徳島県の研究の経緯から

①大会主題について　②大会副主題について　※めざす子ども像

2 社会に対する認識と判断する力を育む社会科学習

(1)「認識」について

(2)「判断する力」について

(3)認識と判断する力の関わりについて

3 研究内容

研究内容１　単元構想と振り返り

(1)**単元構想の方策**（子どもの意識がつながる単元にする方策）

①日常的アプローチ　②学習問題づくり　③予想や学習計画と単元展開

(2)**振り返りの方策**（子どもの意識をつなげる振り返りの方策）

①振り返りの観点

ア.自分の学習や変容を自覚する観点　イ.今後の学習や生活へとつながる観点

②考えの見取りと活用

研究内容２　判断する場面の設定

(1)**柔軟な場面設定**

A 社会への関わり方を考える判断（社会への関わり方を選択・判断）

B 深く分かることにつながる判断（社会の特色や意味などに迫る判断）

C 見通しをもつことにつながる判断（今後の学習につながる予想を含む判断）

(2)**判断への意欲を高める工夫**

矛盾「～なはずなのに…変だよ！」など　**対立**「…という考えに反対だよ！」など

葛藤「決めきれない…どうしたら…」など　**相違（ズレ）**「それぞれ違う考えだ…どれがいいの…」など

情意（感情）　「…ひどいよ！」「～のために何とかしたい…」など

課題の明確化「課題のここに注目すれば…」など　等

研究内容３　考えを深める手だて

(1)**発問・言葉かけ**

ゆさぶる　焦点化する　具体化する・一般化する　整理する

子ども同士をつなぐ　確認する　等

(2)**資料提示**

(3)**板書**

(4)**視点や立場の明確化**

Ⅱ　研究の方向性について

※「認識」と「判断する力」の両方をバランスよく育む

社会のことが深く分かる子ども　　**根拠や理由をもって考えを決められる子ども**

○めざす子ども像

社会の特色や意味などが分かるとともに、根拠や理由をもって自分の考えを決める力を身につけ、他者とともに社会の在り方を考える。そして、未来に向けて考え続け、社会の創り手として、よりよい社会を協働して切り拓いていくことができる子ども。

○主題設定の理由

・主権者として予測困難な未来に向けて、協働しながら課題を解決し、変化を乗り越えていく。
・一人一人が社会を創る主体となり、持続可能でウェルビーイングが実現されるよりよい社会へ。
　→社会の在り方を未来に向けて考え続け、他者と協働しながら社会を切り拓く子どもの育成

○徳島県の主な主張

・予測困難な厳しい未来を生きる子どもたちに、**認識と判断する力の両方をバランスよく育む**。
・**判断する力を、主権者として予測困難な未来の社会を切り拓いていくために必要な力であると捉えている。そして、判断する場面を取り入れることは、主体的・対話的で深い学びを生み出し、学習指導要領の目標を実現するための工夫であるとも捉えている。**友達などの他者と対話し、議論し合う経験を繰り返す中で、認識と判断する力を育む。

○言葉の整理　（「認識」「判断する力」）

「認識」　用語・語句などの断片的な知識ではなく、**特色や意味などの深まりのある知識**のことと捉えている。徳島県では知識ではなく、「認識」という言葉を用いて研究を進め、**社会のことが深く分かる、社会の意味や特色などが分かる子どもの姿**をめざす。

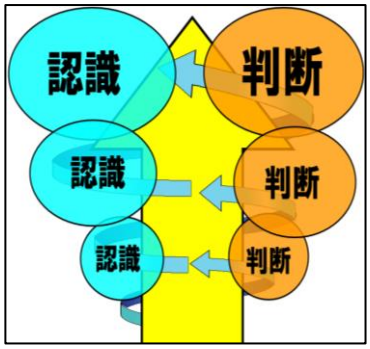
（例）「何のためにしているか分かった」「どのような工夫をしているか分かった」
「その地域がどのようなところか分かった」など

「判断する力」　**根拠や理由をもって自分の考えを決める力**であり、友達などの他者と様々な立場や視点を踏まえて**対話をし、議論し合う中で育まれていく力**であると捉えている。（「選ぶ」の意味合いも含む）

（例）ごみ処理場の方の「家庭から出るごみの割合が多い」というお話を根拠に、「家庭でごみをあまり出さないように意識してもらうことが必要だから」のように理由を考え、「ごみ袋の有料化に賛成」と決める。

「認識」と「判断する力」の関わり

・判断をすることで、身につけた認識が活用されより深いものとなる。認識が深くなると、判断もより深いものとなる。
・子どもたちの頭の中では、認識と判断が相互に関わりながら成長をしている。**分かりながら判断し、判断しながらさらに分かっていく**。それを繰り返していくと、自分たちでよりよい判断を下し、未来の社会を切り拓く子どもへとなっていくだろう。



Ⅲ 研究内容について

研究内容１　単元構想と振り返り

子どもの意識がつながり、自らの学習を調整しながら主体的に問題を追究できるようにすることが大切である。さらには、学習の場（45 分の授業、1 単元の授業等）を離れても意識がつながり、よりよい社会の実現、発展に向けて、その在り方を考え続ける子どもをめざしていきたい。

（1）単元構想の方策　（子どもの意識がつながる単元にする方策）

①日常的アプローチ

日常的（単元に入る前）に、関心を高めたり見取ったりし、単元へ意識がつながるようにする。

（例）朝の会の話題、地図や年表の掲示、学級文庫、実物教材、日記や会話からの見取り　など

②学習問題づくり

・発問や資料提示によって、意図的に方向づける。

・曖昧さや意外性などの観点から出合いの工夫　＋　疑問や予想などのやり取りの充実

→「もっと知りたい」のように解決に向けた意欲を高める。

→「これを調べれば･･･」のように見通しをもつことができるようにする。

③予想や学習計画と単元展開

・疑問や予想を分類・整理し、学習計画（学習内容・学習方法）へ生かし、見通しにつなげる。

・単元の中に、学習方法等を子どもの意思で選ぶ（任せる）場をつくる。

→個別最適な学び、学習調整

（例）1、予想を確かめる資料　2、調べる観点　3、調べる方法　4、調べる順番　5、まとめ方　など

・「どんな資料・事実と出合えるようにするか」など意図的・計画的な部分も重要。→両方を考えて

（2）振り返りの方策　（子どもの意識をつなげる振り返りの方策）

①振り返りの観点

ア．自分の学習や変容を自覚する観点

（例）学習前は･･･学習後は･･･　予想と比べて･･･　成長を感じた点は･･･　自分の調べ方を振り返ると･･･ など

イ．今後の学習や生活へとつながる観点

（例）さらに調べる(考える)べきことは･･･　これからも考え続けたいことは･･･　これからの学習で調べる方法は･･･　など

②考えの見取りと活用

（例）アンケート、立ち位置の変化が見えるワークシート、インタビュー形式の対話、振り返りシート、授業支援アプリなどから考えを見取り、単元の立ち上げや今後の学習に活用していく。

研究内容２　判断する場面の設定

認識と判断する力をバランスよく育む中核となる場面である。なお、ここでいう判断する場面は、「学習内容」について決めたり選んだりする場面である。学習方法等を決めたり選んだりすること（まとめ方を決める、資料を選ぶなど）は判断という呼び方はせず、研究内容１の一つとして研究を深めたい。

（1）柔軟な場面設定

・**判断する力は繰り返し経験することで少しずつ高まる力**であると捉えている。

・学習指導要領を踏まえた中で、「このような場面でも考えを決める学習をつくれないか」「45 分の学習の後半で少し意見が分かれる場面をつくれないか」のように、それぞれの授業者の創意工夫を生かして、**弾力的に柔軟に判断する場面を取り入れる**。

※毎時間、判断する場面を無理やり設定しなければいけないという趣旨ではない。

A社会への関わり方を考える判断（社会への関わり方を選択・判断）

社会に見られる課題を踏まえ、自分たちに協力できること、社会の在り方などを考える。

（例）「私たちはどうすればいいか？」「どのような協力ができるか？」「これからは何が大切か？」
「今は何を優先すべきか？」「これからの社会ではどのようなことを大切にすべきか？」など

B深く分かることにつながる判断（社会の特色や意味などに迫る判断）

・どちらかというと認識を深める（社会の特色や意味などを考える）ことに重点。

・判断を求めることにより、立場を決めて自分の意見を考え、学んだことを主体的に活用する。そして、社会的な根拠や理由を基に友達と対話的に意見を伝え合うことで、考えが多角的になるなど、判断するという学習経験を積みながら認識が深まる。

・「賛成？」「必要？」「～と言える？」「問題ない？」「特に～なのは？」など様々。

（例）「伝統的な○○が新しく□□することに賛成？」について社会的な根拠や理由を基に判断し話し合う中で、伝統を守る苦労と、時代に合わせて工夫していることが深く分かる。

C見通しをもつことにつながる判断（今後の学習につながる予想を含む判断）

・学習問題をつかむところ、予想するところなど単元や授業の導入時などで行うことが多い。

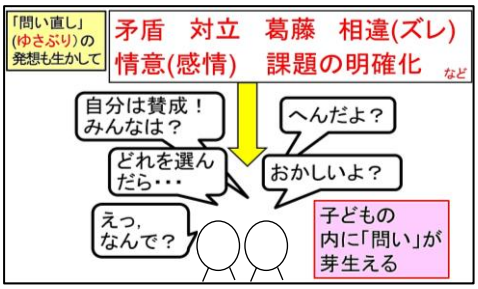
・前単元までの学習や社会生活における経験から見いだしたことを活用して話し合うことが多い。

（例）「（前の時代の学習を踏まえて）新しい時代に取り組むべきことは何か？」ということを、予想を含めて判断し話し合う中で、「本当に○○なのか調べたい」など今後の学習の方向性を見いだす。

（2）判断への意欲を高める工夫

「友達と話し合いたい」「みんなの意見を聞きたい」のように、判断への意欲が高まるようにする。そのために、これまで研究を進めてきた「問い直し（※）」の発想も生かして、矛盾や相違（ズレ）などから考えをゆさぶり、「迷う」「困る」状況を創り出す等、意欲を高める工夫について研究を進める。

※「問い直し」･･･分かった（分かったつもりになっている）ことに対して、ゆさぶりの問いを投げかける



例えば、次のような要素に注目して教材研究や授業づくりを行う。

矛盾　「～なはずなのに…変だよ！」など
対立　「…という考えに反対だよ！」など
葛藤　「決めきれない…どうしたら…」など
相違（ズレ）　「それぞれ違う考えだ…どれがいいの…」など
情意（感情）　「…ひどいよ！」「～のために何とかしたい…」など
課題の明確化「課題のここに注目すれば…」など

研究内容３　考えを深める手だて

社会科らしい学びとなるように社会的事象の「見方・考え方」（空間・時間・相互関係等の追究の視点、比較・分類・総合・関連付け等の追究の方法）を意識して、考えを深めるための手だてを講じる。

（1）発問・言葉かけ

ゆさぶる　焦点化する　具体化する･一般化する　整理する　子ども同士をつなぐ　確認する　など

（2）資料提示

地図・年表・関係図などの資料によって、ゆさぶる、焦点化する、新たな情報を提示する など

（3）板書

・対立する意見を左右に書き分ける　　・賛成の度合い（考えの立ち位置を表す）
・キーワードを囲んで焦点化し、共通点や相違点などを問いかける　など

（4）視点や立場の明確化

・「農家（生産者）」と「買う人（消費者）」それぞれの立場から意見を考える
・「家庭で」「地域で」「消防署と協力して」火事を防ぐためにできることをそれぞれ考える
・「本当にできるか（実現可能性）」「誰がすればよいか（主体）」「今すぐできるか（手軽さ）」考える など

※詳細な研究計画は、社会部会 HP に掲載しております。ご活用ください。
https://shokyoken-shakai.tokushima-ec.ed.jp/